

「問いのスピリチュアリティ」 から幸福を問う

林 貴啓*

要 旨

スピリチュアリティの観点から「幸福」を考えるのなら、この概念をどう理解するかが重要である。本論考では、スピリチュアリティを「問い」と「答え」の位相に区分する視点から、「問いのスピリチュアリティ」に立って考察を進めてゆく。スピリチュアリティを人生の究極の意味・目的に関わる「問い」として理解するならば、これをほとんど誰にも共通する関心事とする道が開かれる。また、すでに存するスピリチュアルな「答え」を改めて問い直す、というしかたで、スピリチュアリティの問題系に批判的・反省的な契機を確保することも可能となる。幸福に関して言えば、「問いのスピリチュアリティ」の視点は、「身体・心理・社会的なもの」の次元で考えられてきた「幸福」のありようを問いに付し、「有限なもの」「現世的なもの」を超えたものの「可能性」を視野に収めたうえで、より深い幸福のありようを問うてゆく、という展望を開く。そこではつまるところ、私たちの有限な人生の「意味」が問題となるのである。この「問いのスピリチュアリティ」から幸福を問う視点は、実存的精神医学者・V. E. フランクルの立場によっていっそう深められる。ニヒリズムをもたらす「人間像」「人生像」を問いに付し、「人生の意味」に関する問い方をも問いに付してゆくこと、さらには個別の「意味」を超えた「超意味」に開かれた展望を開いてゆくこと、といった示唆が、フランクルの思想から得られるのである。

キーワード：問いのスピリチュアリティ、幸福、人生の意味、
ヴィクトル・フランクル、ロゴセラピー

1 スピリチュアリティを「問い」として考える

人間存在を全体として（ホリスティックに）理解しようとするならば、そしてほんとうに人間らしい生を営むためには、いわゆる「現世的」な次元へのまなざしだけでは十分ではない。こうした認識が次第に共通了解となりつつある。その認識を端的に表したのが、この日本でも普及を見せつつある「スピリチュアリティ」という言葉である。周知のように、WHOの「健康」定義改正案に「スピリチュアル」の文言が登場した。ここでは「健康」の構成要素として、身体的・心理的・社会的な次元での「健康」に加えて、スピリチュアルな次元もまた考慮されなければならない、という提言が打ち出されたのである。

「身体的・心理的・社会的」な次元に還元、解消できない大切なもの、そういう何かが人間のうちには存在する。スピリチュアリティは、この次元を指し示すために登場した用語である。従来は「宗教」が引き受けていた事柄であり、今日でも一定の宗教的立場のもとで語られることもあるが（カトリックに多い。また鈴木大拙の日本的霊性）、必ずしも特定宗教への信仰を前提とはしないと考えられる。「宗教的ではないがスピリチュアル」という言い回しがこれを表現しよう。従来「宗教」と関わりの深かった領域を、直接「宗教」に触れることなく問題にすることができる概念。スピリチュアリティとは、機能的にはまず、このように考えることができる。特定宗教への信仰をもたない人々が大多数を占め、多くの人々が「宗教」という言葉そのものに違和感・距離感をもつ現代日本の状況において、スピリチュアリティとはまさに待ち望まれていた言葉だといえる。

「スピリチュアリティと幸福」 この問題について考えるということは、スピリチュアリティの観点に立ってこそ見えてくる幸福のありようとは何かを突き詰める、ということであろう。とはいえ、スピリチュアリティをどう理解するかをめぐっては、論者の間でも意見が分かれるところである。本稿では、「問いのスピリチュアリティ」という観点に立って、考察を進めてゆきたい。

スピリチュアリティにおいて「問い」と「答え」の位相を区別することについては、筆者はすでに他所で論じた〔林, 2006b〕。「問い」のスピリチュアリティは、「人生の究極の意味・目的」とは何か、それはどのようにしたら見いだせるのかを、自覚的に問題にしてゆこうとする関心・姿勢にある。ただ、現世的・世俗的なもの、「身体・心理・社会的なもの」を超えるものの「可能性」が問いに登ってさえいれば、最終的にどんな答えが見いだされるかについては、オープン・エンドのままでも成り立つ。それに対して、「答え」のスピリチュアリティは、そうした「問い」に何らかの答え、方向づけを与えようとするものである。たとえば、「生かされて生きていることの自覚」「超越者や来世の存在を肯定した生き方」といった形態が考えられる。この二つの位相の緊張関係においてスピリチュアリティを捉えてゆくことから開けてくる展望について、筆者は考察したのである。

もちろん、これはスピリチュアリティとは何か、本質主義的に規定するものではない。確かに現在の日本での「スピリチュアリティ」の用法は至って多義的であり、論者の間でも混乱の元となっている¹⁾。だからといって、その意味を一義的に限定したり、「標準化」したりしようすることが、「ひとつの言葉では表しえない深淵」であるスピリチュアリティの多様な含みを無視している、という辻内〔2005: 53〕の批判はもっともである。「スピリチュアリティ」はさしあたり、人間にあって「身体的・心的・社会的」な次元では尽くされない何かを探る手がかりとなる、発見法的な言葉として用いてゆくほうが生産的で、有望であろう。

その意味で「問い」と「答え」の位相の区別というのも²⁾、あくまで錯綜したスピリチュアリティの問題状況に対して、ひとつの「見通し」あるいは「座標軸」を与える試み、という位置づけである。そこでこの試みをもつ意義について触れておこう。

「問い」の位相を独自なものとして確保することの意義は、第一に、スピリチュアルな事柄をほとんど「誰でももの」関心事とする道を開くことである。スピリチュアリティはそもそも、特定の教団宗教への帰属・信仰を前提することのない概念だから、基本的に「宗教」よりは広範囲の人々に受け入

れられるだろう。けれども「超越者の存在」や「諸宗教の核心にある体験」などについて何らかの「答え」を含んだものとしてスピリチュアリティを打ち出すかぎり、結局は限られた人々にのみ受容可能な立場にとどまってしまう恐れは強い。まして「特定宗教を離れている」ことを理由に、スピリチュアリティの名のもとで特定の「答え」、価値観が一般化される、ということは懸念すべき事態であろう³⁾。

だが「人生の意味についての根本的な問い」であれば、はじめから何か超越的なものの存在を信ずることは要請されない。最終的にどんな「答え」に行き着くにせよ、「問い」に臨んでいるかぎり人はスピリチュアルな事柄に関わっている、と見るならば、スピリチュアリティはずっと人々に開かれたものとなる。それはより明確な方向性と内実をともなった「答え」のスピリチュアリティを求めてゆく機縁、窓口ともなるであろう。「スピリチュアル教育」「スピリチュアル・ケア」で問題とすべきなのは、それらが生徒・患者に対して特定の信仰や価値観を押しつけることが戒められるかぎり、こうした「問い」のスピリチュアリティにちがいない。

これはスピリチュアリティが初めて関心事となるとき、いわば「初発時点」での問題である。だがスピリチュアリティの事柄を、「問い」から「答え」へと、単線的に考える必要はない。「問いのスピリチュアリティ」は、すでに出された「答え」を「問い直す」という意味でも考えることができる。確かに「スピリチュアリティ」には現実さまざまな立場が見られる。一定の「答え」を含んだスピリチュアリティの見地も少なくない。だがその「答え」は究極的なものなのか。それは果たして普遍性を主張できるものなのか。一面的なものに終わっていないのか。それを絶えず問い直してゆく批判的・反省的契機として、「問いのスピリチュアリティ」の位相は働くことができる。そもそも、この世俗化、「死生観の空洞化」[広井, 1997: 56]の進んだ日本の社会のなかでスピリチュアルな問いに臨むとすれば、この社会のなかで育んできた既存の人生観・幸福観を「問い直す」という側面は必ず伴うであろう。「問い直す」という契機を積極的に設けることで、スピリチュアリティの問題系を、すぐれてダイナミックなものにすることも期待でき

る。

本論考では、「幸福」という問題に、こうした意義をもつ「問いのスピリチュアリティ」の観点から切り込んでみたい。まず「スピリチュアルな問い」において「幸福」を考えた場合に、いかなる展望が開けるかを見てゆく。そのうえで、「問いのスピリチュアリティ」と親和的な立場を持っている実存的精神医学者・V. E. フランクルの「実存分析」の思想を手がかりとして、さらに考察の深化を図ってゆくことにしたい。

2 スピリチュアルな観点から「幸福」を問うとき

「問いのスピリチュアリティ」の観点から「幸福」を考えるとときまず問題となるのは、「身体・心理・社会」の領域でのみ考えられていた「幸福」像を問いに付すことであろう。そうしたいわば「現世的」「自然主義的」な次元で思い描かれた幸福のありようを、それが本当に人間の、そして自分の幸福と言い切れるものかどうか、問い詰めようとするのである。こうした次元を超えたところにこそ幸福のよりどころが存するのではないかと問い求めてゆくことである。「スピリチュアルな問い」には「問い直し」が含まれている、と先に述べたのも、こうした意味でのことにほかならない。

こうした「問い」に目覚める最大の機会が、人が「死」に直面したときである。目に見えるもの、形あるものは、巨万の富や不動の名声であっても、死に際してはほとんど何の役にも立たない。孤独に最後を遂げる運命を免れること、わが死を看取り、悲しんでくれる人がいることは確かにいくらかでも死にまつわる苦悩を和らげるだろうが、これとて死そのものにまつわる根源的な問題を解決しうるわけではない。死とは人間の存在の有限性、はかなさを最も決定的に思い知らせる人生の事柄であり、それゆえ、死に際してそれまで求めてきた、あるいは築いてきた幸福も、「結局はむなしいもの」と映ることは誰にもありうる事態であろう。「スピリチュアル・ペイン」とは、まさにこうした場面での「人生の意味を求めるたましいの苦悩」にほかならない。

死、つまり人生の文字通りの終末に際することは、人生そのものがトータルに、根本的に問題となる機会としてはもっとも決定的なものであり、その意味でスピリチュアリティをめぐる真摯な議論が、医療、ことに終末期医療の文脈で沸き起こったのも当然である。しかし、人がスピリチュアルな問いに直面するのは何もそうした機会に限られたものではない。近親者との死別はもちろんのこと、学業や仕事上の挫折や失恋など、それまで人生をよりどころとしてきたものの喪失が、「そもそも自分は何のために生きているか」を問う引き金となることもある。現世的な意味では成功・幸福の絶頂といえるような境遇のなかで、それが結局は「むなしい」のではないか、という問いが頭をもたげることもある⁴⁾。あるいは何気なく思索をめぐらして、人間誰もが、もちろん自分もいずれは死ななければならない運命にあることに思い至り、それだけでニヒリスティックな気分に苛まれるのは子どもですらありうることである。

原理的には人間存在が有限なもの、死すべきものであるかぎり、いつでもそうした問いは頭をもたげうるだろう。W. ジェイムズの言葉を借りれば、「宴の席でも、いつも髑髏は微笑んでいる」[James, 1902 = 1988 : 209] のである。いざ死に臨むというのは、この問いをどうにも逃れようがなくなったときでしかない。

その意味でも、スピリチュアリティが「医療」の文脈にのみ閉じ込められるのは、望ましい事態ではない。現状では、葛西 [2003 : 154] の指摘によると、現在の日本において、「スピリチュアリティ」という言葉を使うのは特に医療・看護をはじめとするヒューマンケアの専門職に偏っているという。これを受けて、辻内 [2005 : 52] は、「スピリチュアリティ」の現在の用法には専門家主導による「医療化」という傾向が見られるという。だがここから葛西のように、この概念が日本社会では馴染み深いものにはならず、結局は一般には浸透しにくい、という判断を下すのは早計のように思われる。こうした事態は「スピリチュアリティ」の展望自体の限界を意味するというよりは、むしろスピリチュアルな事柄を日常の場面では人々から遠ざけている、現代日本の世俗化社会の限界を象徴していると解釈したほうがよい

であろう。

だからこそ、人々は死という避けがたい現実直面して、はじめて人生の意味とか、自分の存在意義といった重大事に直面することを余儀なくされるのである。「スピリチュアル・ケア」はこの事態に対処するために提供されてきたわけだが、「予防医学」的な発想からすれば、末期に立ち至るずっと以前からスピリチュアルな事柄に向き合うことのほうが望ましいにちがいない。「教育」その他の場面でのスピリチュアリティの立場のさらなる発展が望まれるゆえんである〔林, 2006a〕。そしてまた、「問いのスピリチュアリティ」の視点は、スピリチュアリティの事柄を遠ざけている、この社会のありようを「問い直す」ことにもつながってくる。

「問いのスピリチュアリティ」から「幸福」を問う視点は、人生のいかなる時点でも問題となりうる。この「問い」はどのような方向に向かって進められてゆくのか、次なる考察で見てゆくことにしよう。

3 問いのスピリチュアリティから見えてくる「幸福」の展望

改めて言えば、「問いのスピリチュアリティ」の観点から「幸福」を問うとは、「身体・心理・社会」の次元だけではどうにもならない人間の「有限性」「はかなさ」という事実、どう向き合い、折り合いをつけるか、を問うことである。ただしここで問題なのは、「有限性」そのものよりも、そこからくる「むなしさ」にある、ということに注意する必要がある。いかなる幸福も結局は死によって消え去ってしまうならば、一切は「むなし」ものではないか、というニヒリズムにどう対処するか、ということである。裏を返せば、問いのスピリチュアリティから幸福を問うなら、幸福の問題は私たちの存在の意味、それも「結局は何のためなのか」ということだから、究極的な意味をめぐる問題に帰着することになる。その意味が見いだせるかどうか、スピリチュアルな観点から見た幸福のありようがかかっている。

そこで、「聖なるもの」「人間を超えたもの」「見えない世界」といった「超越的なもの」の存在いかに、少なくとも「問いにのぼって」いること

がスピリチュアリティの立場として重要なポイントとなる。その存在が最初から肯定される必要はない。だが、私たちの人生が、有限な私たちの存在を超えた意味を究極的にもちうるかどうかが問いとなるのなら、こうした「超越的なもの」の存在を肯定するかどうかは根本問題である。最終的にどんな結論に行き着くにせよ、この問いに真っ向から実存的に向き合うこと、そして何らかの答えを出し、態度を決することは避けては通れない。この問い自体がすぐれてスピリチュアルな事柄であり、「問いのスピリチュアリティ」の根幹である、というわけである⁵⁾。安藤らが『『超越の次元の自覚』がバックボーンにならなければ、スピリチュアリティの本質が損なわれる』[安藤・結城・佐々木, 2001: 8]と述べるのは、この意味で理解すべきところであろう。

このことは、特に現在の日本社会というコンテキストを踏まえるとなおさら重要であろう。というのも、この世俗化の進んだ社会では、「人生の意味」を問うとしても、そのままでは現世的・自然主義的な答えの可能性だけが想定されがちで、「この世を超えたものは存在しない」「人は死ねば無になる」といった答えが自明化しているからである。「超越への扉」が閉ざされている、あるいは扉の存在すら忘れられている、というのが実情だといってよい。こうした事態を「問い直す」ことが、スピリチュアルな問いを問うてゆくうえで不可欠の一步となる。「超越」を最初から肯定しないまでも、いわば「超越への扉」を開けておくことが、「問い」のスピリチュアリティにとって重要な要素なのである。

「身体・心理・社会」の領域のみで完結したような人間のあり方を絶対視しないこと、「有限な自己」の枠内だけで幸福を考える姿勢を「問いに付して」ゆくこと、よりオープンな見方に向かって「幸福」像を開いてゆくこと

こうしたことが「問いのスピリチュアリティ」の立場から語りうる「幸福」への展望である⁶⁾。このようにしてスピリチュアルな方向に「問い」を深めてゆくことは、実存的精神医学者・フランクルの立場からさらに示唆が得られる。次節でこの点に立ち入ってゆこう。

4 フランクルと「問いのスピリチュアリティ」の視点

すでに「問いのスピリチュアリティ」の視点から開かれる幸福の展望についてはいくらか示唆してきたが、この展望を実存的精神医学者・V. E. フランクルの思想を手がかりにさらに発展させてみたい。フランクルといえば何より『夜と霧』の著者として知られる。この歴史的名著のなかで、彼はナチス・ドイツの強制収容所の凄絶な体験を、その生き証人として綴った。だがそれと同時に、そうした極限状況のただなかにあっても、なお高貴さと尊厳を失わずにいた人間も存在することも告げ知らせた。「ガス室を発明した存在であると同時に、ガス室の中でも毅然として祈りの言葉を口にする存在でもある」[Frankl, 1951 : 50/92] 人間の悲慘と偉大を克明に描き出したところに、この本が長きにわたって読み継がれ、多くの人々の心を打ってきたゆえんがある。

その鍵は「意味」にあった。文字通りすべてを奪い去られた人々の間でも、「生きることの意味」への渴望は強烈なものであった。人々が、収容所の過酷な苦境のなかで、なお人間としての尊厳を保ちうるかどうかは、まさに苦悩に満ちた生に「意味」を見いだせるかどうかにかかっていた。「いかなる時にも、人生には意味がある」という自覚が、人間の生を最後まで支えるものであった。人間の根源的な動機を「快楽への意志」(フロイト)や「権力への意志」(アドラー)よりも、「意味への意志」に見いだす人間観は、こうした体験をもとに実存的に裏打ちされ、鍛え上げられたものであった⁷⁾。

こうした「意味への意志」は、「スピリチュアルな問い」と重なり合う。「スピリチュアルな問い」が人間にあってどこまで深い関心事であるかを、理論のみならず体験に裏打ちされたしかたで示したのがフランクルの立場である。「スピリチュアリティと幸福」という問題系において、本稿の展望に彼の思想が示唆を与える点はまずここにある。

戦後、フランクルが臨床家として向き合ったのは、戦争中、ましてや収容所の状況とはうって変わった、豊かな産業社会・消費社会に生きる人々の

「人生の意味」をめぐる苦悩であった。テクノロジーと社会福祉制度を通して人々に豊かで快適な生活を保障し、近代の輝かしい約束を果たしたかに見える今日の社会のなかでも、人々の「意味への意志」が満たされない苦悩はやむことはなく、むしろ切実なものとなった。

「低次の欲求の満足も不満も、人間に意味の探究を促す」[Frankl, 1978: 33-34/42] フランクルがこう述べるように、強制収容所と豊かな社会という両極端の状況いずれにおいても切実であるとは、「意味への意志」が、それだけ人間にとって根本的なものであるという証といえよう。それはまた、「豊かな社会」が約束すると見えた「幸福」が、それだけで人間を本当に満たしうるかどうかを「問い」に付す機縁でもある。この意味での「問いのスピリチュアリティ」にも関わってくる展望をも、フランクルの思想は有している。

そこで、フランクルの視点が「問いのスピリチュアリティ」の立場をどのように深化させてゆくのか、その意義を、以下の考察で見てゆくことにしよう。

4.1 人間像を問いに付す 還元主義批判

フランクルがまず求めたことは、生きることの「意味」への問いを「精神」の次元に属する事柄として、正当に扱うことであった。この姿勢はフランクルの人間存在論が支えている。フランクルは人間を「精神 - 心理 - 身体」の三つの次元からなるものと理解する。特に強調される点は、「精神」の次元が、「心理 - 身体」の次元には還元できない独立性をもっており、人間を人間たらしめる固有の次元である、ということである。人間は誰しも遺伝的な条件や社会的環境、心理的な衝動などの制約を受けている。それらはある意味で「運命」かもしれないが、人間は被制約的な存在である。しかしその運命に対してどう向き合うかは、なお個々の人間自身にかかっている。精神とは、こうした「身体・心理・社会的なもの」に対して距離をとり、何らかの「態度」をとることを可能にする次元なのである。この点では、「身体・心理・社会的なもの」では尽くされない何かを希求し、人間の真にホリステ

ィックな理解を要求するスピリチュアリティの立場とは、もとよりごく親和的な思想をみることができるだろう。

こうした人間理解から、哲学的なレベルで「スピリチュアルな問い」の立場を推し進めた展望が開かれる。それは、一面的な人間観、また一面的であるがゆえにニヒリズムにも至る人間観を「問い」に付してゆく、というものである。それは「還元主義」に対する批判となって表れている。還元主義とは、人間の、あるいは現実のある一つの層を絶対化し、他のすべてをその層に還元しようという立場である。人間の営為が何に還元されるかによって、還元主義は「心理主義」「生物学主義」「社会学主義」といったさまざまな形態をとる〔Frankl, 1951 : 27-8/53〕。この結果、人間のあらゆる動機づけ、あらゆる営為は、ある時は心的衝動に、ある時は遺伝機構に、またある時は権力関係に還元されることになる。「意味」を求める要求も、正面から聞き届けられることなく、それ自体としては無意味な何かの表れに「すぎない」ものとして扱われる。行き着く先はニヒリズムである。

心理学、生物学や社会学が人間について明らかにした知見が間違っているというわけではない。ただ人間の一面でしかない事柄を、全面に渡って適用しようとするところに錯誤がある。それは「精神」の次元まで含めた、人間存在のホリスティックな理解を妨げるからである。そして「意味」に関わる人間の次元を抹消してしまうからである。こうした一面的な人間理解は、たえず「問い」に付してゆく必要がある。

総じて فرانクル は、あらゆる形の「主義」への批判者であった。およそ「主義」たるものは、世界を存在の一つの層ないし次元に還元し、それ自身を絶対化しつつ他のすべてを相対化することで実在の豊かさを切り詰め、人間存在の意味を奪うものだからである。一定の立場からすべてを裁断しようとするあらゆる「主義」の暴力性を絶えず告発しつつげた点で、フランクルの主張は「全体化」をとり行なう概念体系の暴力性をたえず告発しつづける、「脱構築」の作業にも比することができるだろう。

ただし、この「脱構築」は「再構築」への志向を伴っている。より「意味への意志」を、つまりスピリチュアルな志向を容れうる、よりホリスティッ

クな人間理解をめざして、あらゆる一面的な「主義」を告発していったのである。この意味で、「脱構築」というより「再構築」のポストモダニズムに位置づけることができる、ということは、筆者が別の場で論じておいた〔林, 2004〕

再構築といっても、単に人間らしさ、人間の尊厳を回復する、というだけにとどまるものではない。それは「人間学主義」、つまり、人間を万物の尺度としようとする見方でさえ、フランクフルは問いに付す〔Frankl, 1951 : 81/148〕。「すべてが人間のため」だとすれば、「人間は何のために存在するのか」が見えなくなるからである。これも別の形でニヒリズムに至りかねない。人間の絶対化すら問いに付し、より「超越」の可能性にも開かれた人間像を求めてゆくのがフランクフルの視点なのである。

4.2 実存的な次元での「問い」 「絶望」を問い直す

ここまで哲学的な場面で、フランクフルが「問い」のスピリチュアリティを展開していったことを見ていった。だが「問い」の立場は、より臨床的・実存的な場面、つまり「幸福」と直接関わりの深い場面でも表れている。それが「絶望」という心の危機に対する向き合い方である。

生きることにあらゆる意味も望みもない、という絶望は、ニヒリズムを最も如実に表現する情念である。だがフランクフルによると、絶望が生じるのは、人が何かを偶像化しているからである〔Frankl, 1951 : 87-8/158〕。この学校には入れなければ、この事業が成功しなければ、この人と結ばなければ、もはや生きることに意味はない。そのように感じ、考えて人は絶望することがある。だがこのとき、人は相対的価値しかもたないものを絶対的価値にまで高めようとしている。何かある関心事を、それだけが唯一人生を生きるに値するものだとして受け取ったときのみ、それが失われたときに人は絶望する、というわけである。フランクフル自身、収容所に囚われる際、ほぼ完成して出版までこぎつけようとしていた著作の原稿をナチス当局によって容赦なく奪い去られたとき、こうした絶望に襲われたのであった。「...さえすれば、...さえあれば、幸せになり、自分の人生は意味あるものとなるだろう

に」という希望もまた、その裏返しの偶像化といえよう〔ジョンソン，ルール，1999：12〕。

この視点からすれば、「人生に意味などない」というシニカルな態度さえ一種の偶像化に陥っている。ここにはその人の、合理性をもって任ずる自らの判断の絶対化が見られるからである。この判断によって自らを閉ざしているだけだからである。この姿勢自体が、問いに付されるべきものなのである。先に論じた還元主義、いやおよそ「主義」というものの、その問題点は偶像化されているところにあるともいえる。

そして絶望を超え出るとは、こうした「偶像化」に基づいていた人生観を問い直すことによる。 فرانクルのロゴセラピーの立場は、こうした「偶像化」から人を解放し、いかなる人生も、それに耐え抜くという責務に身を捧げるとき無条件に意味に満ちている、という事実へと向き合うよう促すのである。

収容所体験のなかで、フランクルはこれを決定的なしかたで遂行した。収容所から生きて出られるかどうか、が多くの被収容者たちの心を悩ませていたなかで、彼は問い直したのである。生き延びることだけに意味がある生ならば、その意味は僥倖に左右されるだけで、もともと生きるに値しない生ではないか、と。むしろこの収容所のなかで向き合わなければならない運命、苦、死に意味があるのかどうか問題ではないか、というのである。これが、生きて出られる保証はどこにもない収容所の苦境のなかで、彼に絶望に陥ることを免れさせたのであった。「単に生き延びること」すら偶像化されることがあり、これを超え出たところになお意味を見いだす可能性は開かれている、というわけである。

このように実存的な場面でも、人をそれこそ不幸にするような人生態度、人生観を「問い」に付す、という立場ははっきりと見てとれる。哲学的にも実存的・臨床的にも、フランクルは「問いのスピリチュアリティ」を一つの方向へ、より深く推し進めていったということができる。「意味への意志」という「スピリチュアルな問い」に根ざしたフランクルの思想は、また「問い直し」という意味でも深められていた、ということがここで確認できよ

う。だが「問い直す」ことの先に、どんな展望が開かれるか。「問い」をさらに深めていったらどうなるか。続いてこれを論じてゆくことにしよう。

4.3 「問い」のしかたの転換 人生の意味をめぐる「コペルニクス的転回」

フランクフルが、人生の意味をめぐる「コペルニクス的転回」と呼んだ思想において、問いのスピリチュアリティの立場は、決定的に進められ、深められることになる。これは「人生から私たちがまだ何を期待できるか、ではなくて、むしろ人生が私たちに何を期待しているかが問題なのである」と、人生の意味に関する「問い」の姿勢をまさに180度転換することにある。ここにおいて、私たちは自らを「問う者」から「問われている者」として自覚しなおす。「問いのスピリチュアリティ」が、いわば「問われるスピリチュアリティ」へと変容するところにまで、「問い」の立場を問い直してゆく姿勢がここにある。

「人生から何を期待できるか」とは、言い換えれば自己を中心に据え、自己の欲求に即して世界と人生を観る態度である。E.フロムの用語で言えば、「もつ」という人間の存在様式に対応するといっていよう。この人生態度が限界に行き着かざるをえないことは、「豊かな社会」に生きているはずの人々の「実存的空虚」に、フランクフルが向き合わねばならなかったことでも明らかであろう。「すべては自己のため」だとすれば、それでは「自分は何のために存在するのか」が見えなくなるのである。

また一方で、「人生に期待していたもの」が得られなければ、それは絶望に直結する、ということもある。例えば、先に触れたが、人生のなかで「偶像化」されてきたものが倒壊したときである。さらにフランクフルが体験した強制収容所のなかでは、被収容者たちは文字通りすべてを奪い去られ、「人生に何も期待できない」状況に追いやられた。だが何も収容所でなくとも、「人生から何も期待できない」と感じられ、人生の一切が無意味なものと映ることは、死への直面をはじめとして、どの人にも起こりうる事態である。

こうして、人生の意味に関して、絶望へと至りかねない、つまり幸福をもたらさない「問い方」そのものを問いに付し、新たな「問い方」へと姿勢を

向け変えること、これがフランクルのいう「コペルニクスの転回」なのである。「人生が自分に何を期待しているか」を問う姿勢に、逆に言えば自らを「問われる」立場に置く姿勢に転ずる、というわけである⁸⁾。

この観点に立ったとき、人生は時々刻々、私たちに問いかけてくるものとして現れる。その問いかけは一人ひとり、それぞれの状況で唯一独自のものである。課題は、その問いに対して、適切になしかたで応答してゆくことにある。それは何かを行い、何かを創り出し、何かを体験することで、運命を切り開くことであったり、あるいは逃れがたい運命に直面したときには、その運命を引き受け、その運命に対して何らかの「態度」をとることであったりする。それが「自分は何のために存在するのか」という問いに答えてゆくことであり、意味ある人生を生きるためのよりどころがある、というわけである。この問いの転換は、フランクルが収容所に囚われた仲間たちを勇気づけ、生きる支えとしたものであった。

人間を「人生から問われ、応答すべき存在」として理解する観点について、フランクルは「実存の自己超越性」[Frankl, 1978 : 35/44]を根源的な人間の事実として強調する。実存としての人間は、自分自身を超え出て、自分とは別の何か、誰かに向かって存在するときのみにのみ、本来の意味で自分自身であることができる、ということである。彼がよく用いる喩えで言うと、健康な眼は眼とは別の何かを見るのであり、眼それ自身を見る眼は白内障という病気を患っているように、自分自身が関心事となっている人間は、むしろ疎外された姿、意味を決して見いだせないあり方に陥っている、というわけである。

「幸福」についても、それは人生の問いに答え、意味を実現してゆくなかで結果的に得られるものであって、「幸福そのものを目標とすればするほど、幸福は逃げてゆく」[Frankl, 1978 : 36/46]と、フランクルは語る。性的快楽についてさえも、「快楽」それ自体を追い求めたために、かえって快楽さえも失われてしまう性の営みの例を、彼はしばしば報告するのである。これが幸福をめぐる、フランクル独自の視点であった。

自らを「問う」立場から「問われる」立場に置き直すことで、いついかな

るときでも人生を意味あるものとして、結果として幸福を実現する可能性を開く。こうした「問い方」のそのものを問い直す観点に、 فرانクルが「問いのスピリチュアリティ」を深化させた立場を見ることができる。だがこの「問い」を、固有の意味で「スピリチュアリティ」といえるまでに深めてゆく道を、彼は示唆している。これを次は考察してみよう。

4.4 「超意味」へ向けての問い

フランクルが実存としての人間の「自己超越性」を語るといっても、これは「自分自身を超え出て、別のものに関わる」という純然たる人間的なあり方を指しているのであって、宗教的な意味での「超越」とは、直接には関係がない。彼自身そう明言している [Frankl, 1978 : 94/199]。しかし、「人生からの問いかけに答える」という観点が「自分は何のために存在するのか」という問いとも関わっている以上、有限な人間の次元を超える、という意味での「超越」、つまりすぐれてスピリチュアルな意味での超越とも、深いところではつながってくる事柄であることも否定できない。

フランクルは還元主義が、精神の次元まで含めた人間のホリスティックな把握を妨げ、人間の尊厳と存在意義を見失わせる、と厳しく批判した。だが同時に彼は、人間を宇宙の中心に置き、万物の尺度とする立場、「人間学主義」に対しても等しく批判的であった。人間が究極的なものであれば、そもそも人間が何のために存在するのかが見えなくなるからである。これは別の形でニヒリズムにほかならない。

「人生が何を期待しているか」という際の「人生」の原語は *Leben, life* であり、これは個々人を超えつつ個々人を生かしている「いのち」とも訳せる [山田, 1999 : 143-144]。つまり私たちに問いかけてくるものは、自らの「人生」であると同時に、それを超えた「大いなるいのち」の働きでもある、と解することも可能である。こうした読み方はあくまでひとつの可能性であるが、よりスピリチュアルな方向に向かってフランクルの「問い」の立場を深めてゆくうえでは有意義な視点となるだろう。そしてフランクル自身が「超意味」の概念において展開した思想ともつながってくる。

「^{いのち}人生からの問いかけ」に答えて、私たちが成就してゆく意味は、唯一無二の人と状況に対応した、個別具体的なものである。そのつどの応答を通して、私たちは意味ある人生を生きることができる。だがそれでは、この個別の意味が究極的にはそもそもどんな意味をもつのか、ということがさらに深い問いとなってくることがありうる。それとも、結局は無意味なものなのか、という疑問もまた頭をもたげうるであろう。これは世界全体の意味に関わる事柄であり、スピリチュアルに問うてゆくならば、この問いに達着するのは当然とも言える。フランクルはこうした問いの志向を真摯に受け止め、全体、存在そのものの意味を「超意味」と呼んで思索を進めている。

ただしフランクルは「超意味」を証明の外の事柄として受け止める [Frankl, 1951 : 56/101]。「全体」は人間の理解力を必然的に超えており、絶対的な意味への問いに答えることは人間にはできない、と見るからである。だから彼は超意味が存在する、とは断言しない。ただ、それは「信じる」べき事柄である、と述べるまでである。それを信ずるか、否かはスピリチュアルな意味でもまさに究極的な「問い」であろうが、これについては彼はオープンな「問い」の事柄にとどめている。まさに「問いのスピリチュアリティ」の深い場面で、考えようとしているのである。全体は、超意味か無意味か　ここには私たち自身の実存的な決断の余地がある。

ただし、全体の意味、超意味を否認すること、すべてを無意味であるとみなすことは、つまるところ自分自身を唯一の意味の与え手にして担い手であるとみなすことにつながり、ひとつの傲慢、自己絶対化を含んでいる、ともフランクルは問い返す。何ものにも意味がないのなら、それを何らかの仕方で見抜けるはずだが、私たち人間に全体を見通せない以上、すべてに意味がある、ということを見抜くことはできないはずである [Frankl, 1951 : 56/101]　彼はこのように論じて、立証責任は超意味を否定、懷疑する者の側に課する。こうして、「希望」としての超意味への扉を、あくまで開いてゆこうとするのである。「問いのスピリチュアリティ」の視点を貫いて、深めた到達点ともいえる見地であろう。ただし、私たちが実存するただなかでは、そのつどの具体的な意味に専心すればよく、「超意味」への信仰に固執

する必要はない、とも فرانクルは言う。「超意味」が存するとすれば、「幸福」の場合と同様、あくまで「結果において」のみ与えられるからである [Frankl, 1951 : 58/104]

そして、そのつど実現される意味は、それ自体、永遠的な意味をもちうるとする時間観を、フランクルは「過去のオプティミズム」として展開している。「時は流れ去る。しかし生起したことは歴史として凝固するのです。生起したいかなること、生起しなかったことにすることはできませんし、創造されたいかなるものも、この世界から取り除くことはできません。いかなるものも過去の中で二度と失われることなく、すべてのものは過去存在の中で失われることなく守られているのです」 [Frankl, 1949 : 87/193-4]

これもまた「信仰」の事柄といえるかもしれない。だが、すべては無に帰してゆくから空しいという、時間的な観点からするニヒリズムに対して、ひとつの「問い直し」の見地を提供し、ひとつの「希望」を託しうる展望を開くことは否定できない。自らの個別の行いが永遠の意味をもちうる、という可能性にも開かれた姿勢で生きることは、確かに人生をより意味に満ちたものにする可能性を開く。より超越へと、より深い意味の可能性へと開かれた姿勢へと向かう。これが、「問いのスピリチュアリティ」の視点を、フランクルの思想を解して深めることで「幸福」に関して示唆しうる展望であろう。

5 結 語

「スピリチュアリティはかくかくしかじかのものである、だからこうすれば『幸福』を得られる」という単純な結論を求めることは不毛であろうし、また達成不可能であろう。人間にとって根本的な・究極的なものが関わるスピリチュアリティの問題系は、こうした端的な規定に閉じ込められるほど浅いものではない。だが「問い」という開かれたスピリチュアリティの見地からは、「幸福」の問題に関して、何らかの示唆を提供できるものと思われる。それが、人生の究極的な意味に関して「問い」、「問い直し」、「問いを深

めて」ゆく、という方向性である。一定のスピリチュアルな「答え」を前提することなしに、「問いを深めてゆく」視点は、多様な価値観と志向をもった人たちを相手にしなければならない医療、福祉、教育などの実践者にとっても有意義なものとなることを筆者は期待する。そしてまた、自らスピリチュアルな志向を生きようとする人たちに対しても、である。本論考では V. E. フランクルの立場を手がかりにスピリチュアルな問いを深めてゆく可能性を探ったが、改めてこの問いの方向性を問い直してみることも、さらに深いスピリチュアリティの志向のためには必要となるかもしれない。ダイナミックな立場としてスピリチュアリティを理解することの必要を確認して、論を結ぶことにしよう。

注

- 1) たとえば葛西 [2003] は、「神との深い交わりの状態」「生きがいを求める魂の働き」「いろいろな宗教の共通項、普遍的特徴」「心身両面の刺激による日常性からの離脱」という四つの用例を挙げており、これらの共通項を見いだすだけでもかなり難しい。
- 2) この「位相の区別」に関しては、西平 [2003] の議論を参考にし、さらに発展させたものである。西平は、「スピリチュアリティ」を「宗教性」「全人格性」「実存性」「大いなる受動性」といった多様な訳語の「ルビ」として使用し、これらをスピリチュアリティの多様な「位相」を表現したものとして解することで、その多様な含みを分節化してゆこうとする優れた視点を提供している。
- 3) 森岡 [2005] が「死後の世界を信じられない者」としての立場から死生観やスピリチュアル・ケアの問題を問いに付しているのが、その典型的な一例である。
スピリチュアリティは「特定宗教への信仰とは無関係」という触れ込みのもとで打ち出されることが多いだけに、こうした事態は十分に想定される。
- 4) 後に詳論するフランクルは、こうしたなかで「実存的空虚」にさいなまれる人たちの多さを報告している。
- 5) 実存的に問いぬかれたものであれば、その答えが無神論的、自然主義的なものであっても、広義には「スピリチュアリティ」に位置づけてもよいだろう。例えば「神は死んだ」と力強く宣言し、いっさいの超越的な目標を排して「運命愛」に生きる超人たることを説くニーチェの能動的ニヒリズムの哲学に、深くスピリチュアルなものを感じとる人は少なくないはずである。
- 6) 「問い」のスピリチュアリティは、人生の転機に臨んで、それまでの生き方の根本前提になっていたものを、ひいてはその生き方を促していた社会のありよう

をも問いに付す「脱構築」の契機だともいえる。だがそれは単にそれまでの支えを突き崩し、人をよるべなきニヒリズムへと追いやるものではない。より統合的なかたちで、より人間らしく、人生を生き、死んでゆくための支えを「再構築する」道も開く、「再構築のための脱構築」なのである。それは近代主義的な現世的・物質的な生き方を解体する点で「ポストモダン」ではあるが、「脱構築」ではなく「再構築」のポストモダンの立場、筆者が主題的に論じてきた「建設的ポストモダニズム」の立場に通じる。これについては、林[2004]を参照。

- 7) よく誤解されることだが、「 فرانクルは収容所の体験に基づいてロゴセラピーを創始した」のではない。ロゴセラピーの構想は彼が収容所に囚われる以前にほぼ完成していた。むしろ「意味が人間の人間らしい生を支える」ロゴセラピーの理念の正しさが、図らずも強制収容所という極限状況において試され、そして彼自身によって身をもって確かめられた、というべきである[諸富, 1997: 21]。
- 8) この視点は、文脈を変えれば、環境倫理の問題系に対しても示唆的である。これまでのような「私たち人類が自然から、地球環境から何を期待できるか」態度が環境危機につながり、私たち自身の生存すら脅かすようになった。だが「自然が、地球環境が、私たちから何を期待しているか」と問い方を転換してみたらどうだろう。

文献(フランクルの著作の参照箇所は、原書/訳書の頁数で示した)

安藤治・結城麻奈・佐々木清志, 2001, 「心理療法と霊性 その定義をめぐる」『トランスパーソナル心理学/精神医学』2(1): 1-9.

Frankl, Viktor Emil, 1949, *Der Unbedingte Mensch: Metaklinische Vorlesungen*, Wien: Franz Deutike. (= 2000, 山田邦男監訳『制約されざる人間』東京: 春秋社.)
 , 1951, *Homo Patiens: Versuch einer Pathodizee*, Wien: Franz Deutike. (= 1972, 真行寺功訳『苦悩の存在論』東京: 新泉社.)

, 1978, *The Unheard Cry for Meaning: Psychotherapy and Humanism*, New York: Simon and Schuster. (= 1999, 諸富祥彦監訳『生きる意味を求めて』東京: 春秋社.)

林貴啓, 2004, 「ポストモダンの実存 V. E. フランクルの実存分析への新たな展望」『トランスパーソナル心理学/精神医学』5(1): 59-65.

, 2006a (予定), 「『問いのスピリチュアリティ』からの教育」『死生学研究』7.

, 2006b (予定), 「スピリチュアリティにおける『問い』と『答え』 『問い』の位相から見えてくるもの」日本トランスパーソナル心理学・精神医学学会編『スピリチュアリティの心理学』大阪: せせらぎ出版.

広井良典, 1997, 『ケアを問いなおす』東京: 筑摩書房.

James, William, 1902, *Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature*, New

- York: Modern Library. (= 1988 , 枅田啓三郎訳 『宗教的経験の諸相 (上)』 東京 : 日本教文社 .)
- Johnson, Robert A. & Ruhl, Jerry M., 1999, *Contentment: A Way to True Happiness*, San Francisco: Harper San Francisco. (= 1999 , 菅靖彦訳 『満たされるということ』 東京 : 青土社 .)
- 葛西賢太, 2003, 「『スピリチュアリティ』を使う人々」湯浅泰雄編 『スピリチュアリティの現在』 東京 : 筑摩書房, 123-159.
- 森岡正博, 2005, 「死後の世界を信じられない者の死生観」東京大学大学院人文社会科学系研究科 21 世紀 COE プログラム・シンポジウム報告論集 『死の臨床と死生観』 21-24.
- 諸富祥彦, 1997, 『フランクフル心理学入門』 東京 : コスモス・ライブラリー .
- 西平直, 2003, 「スピリチュアリティ再考 ルビとしての『スピリチュアリティ』」『トランスパーソナル心理学 / 精神医学』 4(1) : 8-16.
- 辻内琢也, 2005, 「スピリチュアリティの残照」湯浅康雄・春木豊・田中朱美監修 『科学とスピリチュアリティの時代』 東京 : ピング・ネット・プレス, 48-56.
- 山田邦男, 1999, 『生きる意味への問い』 東京 : 佼成出版社 .

A New Approach to Happiness based on “Question-Spirituality”

Yoshihiro Hayashi*

Abstract

When thinking about happiness from the viewpoint of spirituality, the way one understands the concept of spirituality is of considerable importance. This article divides spirituality into the phases of “question” and “answer” and focuses on the former to examine the issue of happiness. If we understand spirituality to represent a “question” regarding the ultimate meaning or purpose of life, then it likely to be a topic of interest to virtually anyone. Also, by reexamining the spiritual “answers” that already exist, we gain opportunities to critically or reflectively consider the series of problems of which spirituality is comprised.

The perspective of “question spirituality” presents deeper ways of questioning the concept of happiness, which has typically been considered within the framework of its “physical, psychological and social” dimensions, and incorporate the possibility of going beyond “finite” or “worldly” matters. Where we get hung up is on the problem of the “meaning” of our limited human life. Further depth is added to the notion of questioning happiness from the standpoint of “question spirituality” by the approach taken by existential psychologist V. E. Frankl. His ideas suggested the importance of reexamining “human image” and “image of life” that lead to nihilism, questioning the way we ask about “the meaning of life,” and developing the idea that there is an outlook of “super-meaning” that exists beyond each individual’s meaning.

Key words: question-spirituality, happiness, meaning of life, Viktor Frankl, logotherapy